

乾乳期間が乳量、飼料摂取量、周産期病発生などに及ぼす影響

乾乳期間	試験頭数	分娩2カ月間日乳量(kg)	飼料摂取量(TDN)(kg/日)	周産期病が重症化した頭数※1	受胎日数(日)
40日	3	33.8	14.0	0	129
60日	3	32.3	11.8	2	228※2

※1 周産期病を発生し、分娩後2カ月間での体重減少率が20%を超えた頭数
 ※2 試験頭数3頭のうち、周産期病重症化により1頭が廃用となったため、2頭の平均値



乾乳期間20日短縮

周産期病の発生抑え 日平均乳量変わらず

酪農経営は、飼料や初妊牛の価格高騰で厳しい状況です。乳牛の産次数を増やし、生涯の牛乳生産期間を延長させることが経営改善に直結します。乳牛の病気は分娩（ぶ

の不足状態を緩和する方法で、周産期病を減らし、乳牛の活躍期間の延長が期待されます。しかし、その効果は牛の個体差の影響を受けます。そこで、個体差の影響を受けにくい乾乳期間の短縮方法を検討しました。乾乳期間の短縮は、分娩21日前から増飼せず、タンパク充足率110%とする飼料給与を行い、乾乳期間を40日としました。

その結果、慣行の60日乾乳（分娩21日前からタンパク充足率130%に増飼）と比較すると、分娩後2カ月間の日平均乳量は低下せず、飼料摂取量(TDN)は増加しました。

さらに、周産期病発生を抑制し、繁殖成績の改善効果が見られました。この成果は、牛と酪農経営の双方にウインウイン（互いに利益がある）の効果構築し、健全な牛乳生産に役立てることができま

す。（県農林技術開発センター 畜産研究部門 大家畜研究室 主任研究員 堤陽子）
 んべん）前後に多く（周産期病）、分娩前の搾乳休止期間（乾乳期間）の飼養方法が、重症化を左右します。
 乾乳期間の短縮は、過剰な牛乳生産を抑え、飼料摂取量